

ソ連共産党指導部と われわれとの意見の 相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

外 文 出 版 社

北 京

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

1963年 10月 初版発行

定価 40 円

出版者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万莊)

発行者 中 国 国 際 書 店

(北京 399 号信箱)

編号: (日)3050-714

3-J-569P
00051

ソ連共産党指導部とわれわれとの 意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

(1963年9月6日)

外文出版社

北京

目次

ソ連共産党指導部とわれわれとの

意見の相違の由来と発展……………

「人民日報」編集部……………七
「紅旗」誌編集部……………七

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

(一九六三年九月六日)

付録一

平和移行の問題にかんする意見の要綱……………

(一九五七年十一月十日)

付録二

ブカレストの兄弟党会談における中国共産党代表団の声明……………

(一九六〇年六月二十六日)

付録三

ソ連共産党中央委員会の通知書にたいする中国共産党中央委員会の返書の

なかの、意見の相違を解決し、団結をかちとることについての五項目の提案……………八三

(一九六〇年九月十日)

声 明

ことしの七月十四日、ソ連共産党中央委員会は、ソ連の各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡を発表した。

中国共産党中央委員会スポークスマンは、七月十九日の声明のなかで、「ソ連共産党中央委員会のこの公開書簡は、中国共産党中央委員会の六月十四日づけの書簡を評価したものである。中国共産党中央委員会は、この書簡の内容は事実に合わせていないものであり、その観点はわれわれの同意できないものである、と考える。中国共産党中央委員会は適当な時期に、事実をあきらかにし、論評をくわえるであろう」とのべた。

『人民日報』をはじめ、中国の他の全国的な新聞とすべての省、市クラスの新聞は、七月二十日、ソ連共産党中央委員会の公開書簡の全文を掲載した。中国の放送局もまたこの公開書簡の全文を放送した。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡が発表されたのち、ソ連の全国的な新聞、雑

6 誌はまたもや中国を攻撃した論文と資料を三〇〇編ちかくも発表した。「人民日

報」はすでにそのいちぶの要旨を発表した。

「人民日報」編集部と「紅旗」誌編集部は、きょうからぞくぞく論文を発表して、ソ連共産党中央委員会の公開書簡に論評をくわえることにする。

一九六三年九月六日

「人民日報」編集部

「紅旗」誌編集部

ソ連共産党指導部とわれわれとの

意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

(一九六三年九月六日)

ソ連共産党中央委員会が七月十四日、ソ連の各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡を発表してからすでに一カ月あまりになる。ソ連共産党指導部がこの公開書簡を発表したこと、その後にとつた一連の行動は、すでに中ソの関係を決裂のせとぎわにおしやり、国際共産主義運動の意見の相違を、かつてみない重大な段階におしやった。

いま、モスクワ、ワシントン、ニューデリー、ベオグラードの仲が熱くなり、ソ連の新聞、雑誌はひっきりなしに、中国を攻撃する奇怪な言論を掲載している。ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を公然とうらざり、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明を公然とやぶり、中ソ友好同盟相互援助条約に公然とそむいて、アメリカ帝国主義と連合

し、インドの反動派と連合し、裏切り者チトー一味と連合して、社会主義の中国に反対し、すべてのマルクス・レーニン主義政党に反対している。

当面の国際共産主義運動の意見の相違、中ソ両党の意見の相違は、一連の重大な原則的な問題にかかわる意見の相違である。中国共産党中央委員会、ソ連共産党中央委員会あての六月十四日づけの書簡のなかで、すでにこうした意見の相違の本質を体系的に、全面的にあきらかにした。中国共産党中央委員会は、この書簡のなかで、当面の国際共産主義運動の意見の相違、中ソ両党の意見の相違は、とどのつまり、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則が必要かどうかの意見の相違であり、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義が必要かどうかの意見の相違であり、革命をやるかやらないか、帝国主義に反対するかしないかの意見の相違であり、また、社会主義陣営の団結、国際共産主義運動の団結が必要かどうかの意見の相違であることを指摘した。

国際共産主義運動の意見の相違、ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違は、一体どのような形で生まれたのであろうか、また、一体どのようなようにして現在のこのように重大な事態にまで発展したのであろうか。これはみんなが関心をよせている問題である。

われわれは、一九六三年二月二十七日づけの『人民日報』の社説「意見の相違はどこからくる

か」という論文のなかで、国際共産主義運動の意見の相違の由来と発展を概括的にのべたことがある。当時、われわれはこの問題に関係のあるいくつかの事実、とくにソ連共産党指導部に關係のあるいくつかの重要な事実については意識的に保留して、ソ連共産党指導部のために余地をのこし、必要な時に真相をあきらかにし、是非をはっきりさせるつもりでいた。ところが、いま、ソ連共産党中央委員会の公開書簡が意見の相違の由来と発展というこの問題で、多くのウソをつき、事の真相をまったくねじまげているので、われわれとしても、いくつかの事実をあげてこの問題をくわしく説明しないわけにはいかなかったのである。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、事実の真相を自分の黨員と人民大衆に告げることが恐れている。ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義者にふさわしい公明正大な、事実にくそして真理をもとめる態度をとらず、ブルジョア政客のよくつかう事実をねじまげ、是非を転倒させるやり方で、意見の相違が生まれ、拡大された責任をひたすら中国共産党になすりつけようとしている。

レーニンはかつて、「政治における誠実さは、強さの結果であり、偽善は、弱さの結果である」といったことがある。マルクス・レーニン主義者はいつでも誠実な態度をとり、いつでも事実を尊重するものである。ただ政治的に墮落した人たちだけがウソにたよって生きていくのであ

る。

事実をもっとも雄弁である。事実をもっともよい証人である。われわれはやはり、事実を見てみることにしよう。

意見の相違はソ連共産党第二十回大会からはじまつたものである

俗に、「三尺の水は一日の寒さでは張らぬ」という。当面の国際共産主義運動の意見の相違も、もちろん、いまにはじまつたものではない。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、国際共産主義運動の意見の相違がまるで一九六〇年四月にわれわれの発表した「レーニン主義万歳」など三つの論文からひきおこされたかのような論法をさかんにばらまいている。これはまったくのでたらめである。

事実は一切どうなのであろうか？

事實は、国際共産主義運動の一連の原則的な意見の相違は、すでに七年以上もまえからはじまっているのである。

具体的にいうと、この意見の相違は一九五六年のソ連共産党第二十回大会からはじまったものである。

ソ連共産党第二十回大会は、ソ連共産党の指導部が修正主義の道をあゆみはじめた第一歩である。ソ連共産党第二十回大会からこんにちまで、ソ連共産党指導部の修正主義路線は発生、形成、発展、そして体系化の過程をへてきた。ソ連共産党指導部の修正主義路線にたいする人びとの認識も、しだいに深まってゆくという過程をへてきた。

われわれは、ゆらい、ソ連共産党第二十回大会が現代の国際闘争と国際共産主義運動についてうちだした観点の多くはまちがったものであり、マルクス・レーニン主義にそむくものであると考えている。とくに、いわゆる「個人迷信反対」を口実にしてスターリンを全面的に否定した点と、いわゆる「議会の道」をへて平和的に社会主義に移行するという、この二つの問題はなおさら、きわめて重大な原則的な誤りである。

ソ連共産党第二十回大会のスターリンにたいする批判は、原則のうえでも、方法のうえでも、ともにあやまっている。

スターリンの生涯は偉大なマルクス・レーニン主義者としての生涯であり、偉大なプロレタリア革命家としての生涯であった。レーニンが逝去してのち三十年間、スターリンはソ連共産党と

ソ連政府のおもな指導者であり、また国際共産主義運動の公認された指導者であり、世界革命の旗手でもあった。スターリンはその生涯でいくつかの重大な誤りをおかした、しかし、これらの誤りもかれの偉大な功績とくらべればなんといつても第二義的なものである。

スターリンは、ソ連の発展と国際共産主義運動の発展に偉大な功績があった。われわれは、一九五六年四月に発表した「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」という論文のなかでつぎのようにのべた。

「レーニンの死後、党と国家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運用し発展させた。そして、レーニン主義の遺産をまもり、レーニン主義の敵——トロツキストやジノヴィエフ一味、その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いのなかで、彼は人民の意志と願望とを示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかつた。スターリンがソ同盟人民の支持をえ、歴史上で重要な役割をはたすことができたのは、まず第一に、彼がソ同盟共産党のその他の指導者といつしよになつてソビエト国家の工業化と農業集団化についてのレーニンの路線をまもつたがためであつた。ソ同盟共産党は、この路線を実行にうつして、ソ同盟において社会主義制度の勝

利をもたらすとともに、ヒトラーに反対する戦争でソ同盟が勝利をかちとる条件をもつくりだした。そして、ソ同盟人民のこれら一切の勝利は、全世界の労働者階級とすべての進歩的な人びとの利益に合致するものであつた。そのために、スターリンというこの名も、おのずから全世界できわめて高い榮譽をになうようになった。」

スターリンの誤りは批判すべきものである。だが、フルシチョフ同志がソ連共産党第二十回大会でおこなつた秘密報告は、スターリンを全面的に否定し、プロレタリアート独裁をみにくくえがき、社会主義制度をみにくくえがき、偉大なソ連共産党をみにくくえがき、偉大なソ連をみにくくえがき、また国際共産主義運動をもみにくくえがいている。かれは、プロレタリア革命政党的の批判と自己批判の方法を運用して、プロレタリアート独裁の歴史的経験を真剣かつ嚴肅に分析し、総括するのではなく、敵にたいする方法でスターリンに対処し、すべての誤りをみなスターリン一人におしつけた。

フルシチョフは秘密報告のなかでたくさんウソをデッチあげ、あくどい扇動的な言葉をつかつて、スターリンのことを「迫害狂」だとか、「冷酷な専制」だとか、「大がかりな迫害の道へふみだし、テロの道へふみだした」とか、「国内の状況や農業を映画でしか研究しなかつた」とか、「地球儀を相手に作戦計画をねつた」とか、スターリンの指導は「ソビエト社会発展途上の

重大な障害となつた」などと攻撃した。フルシチョフは、スターリンがソ連人民をみちびいて国内外のすべての敵とだんこたる闘争をすすめ、社会主義的改造と社会主義建設の偉大な成果をおさめた功績をまったく抹殺しており、スターリンがソ連人民をみちびいて、世界で最初の社会主義国をまもり、うちかため、反ファッショ戦争の偉大な勝利をかちとつた功績を抹殺しており、また、スターリンがマルクス・レーニン主義をまもり、発展させた功績を抹殺している。

フルシチョフがソ連共産党第二十回大会でスターリンを全面的に否定したことは、実質的には、プロレタリアート独裁を否定するものであり、スターリンがまもり、発展させたマルクス・レーニン主義の基本的原理を否定するものである。ほかならぬこの大会の席上、フルシチョフはその総括報告のなかで、一連の原則的な問題についてマルクス・レーニン主義を裏切りはじめたのである。

フルシチョフは、ソ連共産党第二十回大会の総括報告で、世界の状況が「根本的な変化」をきたしたという口実のもとに、いわゆる「平和移行」の論点をうちだした。フルシチョフは、十月革命の道は「当時の歴史的條件のもとでは」「唯一の正しい道であつた」が、いまでは状況が変わり、「議会の道を通じて」資本主義から社会主義へ移行する可能性がある、といっている。こうしたあやまつた論点は、実質的にはマルクス・レーニン主義の国家と革命についての学説を公

然と修正し、十月革命の道の普遍的意義を公然と否定したものである。

フルシチヨフはまた、その総括報告で、世界の状況はすでに「根本的な変化」をきたしたということを口実に、レーニン主義の帝国主義についての原理、戦争と平和についての原理がひきつづき有効であるかどうかという問題をだしたが、これも実際にはレーニンの学説を書きかえたものである。

フルシチヨフは、アメリカ政府とその首脳者を帝国主義戦争勢力の代表者ではなく、戦争勢力に抵抗している人物とみなしている。フルシチヨフは「アメリカでは戦争の方式で未解決の問題を解決するよう主張するものが、まだ有力な地位をしめており、かれらはいまなお大統領と政府に大きな圧力をかけている」とのべている。フルシチヨフはまた、帝国主義者が力の立場の政策はすでに破綻したことを認めはじめており、「いくらか冷静なきざし」がかれらの間に「現れている」とのべている。つまり、アメリカ政府とその首脳者は、アメリカの独占ブルジョアジーの利益を代表しないことがありうるし、侵略政策と戦争政策を放棄することがありうる、かれらは平和をまもる勢力になった、というのである。

フルシチヨフは、「平和と各国人民の安全のための闘争の面で、また経済と文化の面で、われわれはアメリカと友好的に協力したいと願っている」と言明している。ほかでもなくこうしたま